

2020年7月1日

沖縄戦遺骨収容国吉勇応援会 倉石寛・西尾慧吾

(1) プロジェクトの背景

このプロジェクトは戦争体験継承の新たな手段の必要性和、ヤマトにおける沖縄戦継承の難しさという2つの課題にアプローチすべく起案された。

戦後70年以上が経過し、戦争体験者の方から直接体験談を聞くだけの戦争体験継承のあり方には限界が来ている。遺品収容家・国吉勇氏の下で、遺品に関する聞き取り調査や、ヤマトにおける沖縄戦遺品の展示会活動が続けてくる中で、証言を補強し、またそれと相互作用するものとして、戦争遺品が沖縄戦学習に果たす役割に対する期待が強まっているように感じられる。国吉氏が戦後60年にわたって収容された遺品は十数万点以上に上ると推定されているが、資料館などの公的施設に寄付された一部を除き、具体的に平和学習などに活用された事例は少ない。そこで、この膨大な遺品を平和学習や沖縄戦の記憶継承に活用できないか、と考えた。

修学旅行等で沖縄を訪れるヤマトの中学校・高校は多い。人権学習の一環として熱心に事前学習を行うところもあれば、観光目当てのように特段の事前学習も踏まずに沖縄を訪れるところもあり、その差はまちまちだ。ただ、一般的な傾向として、被害体験に重点が置かれがちな原爆や都市空襲に比べ、ヤマトの加害性を突き付ける沖縄戦をヤマトの学生に教えるのは、日本の他の戦争体験とは異なる難しさが含まれる。ヤマトンチュの教員がヤマトンチュの学生に対し、どのような問題意識を持ち、どのような教材を用いて、沖縄戦のどのような点を伝えれば良いのか、というのは複雑な問いであり、この問いに一定の答えをもって沖縄戦を教えられる教員は多くはないのではないかと考えた。

以上2つの課題を総合的に解決するため、「沖縄を訪れるヤマトンチュの学生への事前学習としての、沖縄戦遺品を用いた沖縄戦の平和学習プログラム作り」というのが、今回のプロジェクトの目指すところである。

(2) プロジェクトメンバー

沖縄戦遺骨収容国吉勇応援会 倉石・西尾

沖縄平和ネットワーク 北上田（※以上3人がプロジェクト代表者）

沖縄県高教組 外間・當真・大城・下地・富樫

(3) 活動概要

助成金を頂いた後、2019年7月・8月・11月・12月に沖縄で会議・出前授業を実施。また、2020年に奈良県の公立中学校で模擬授業を実施したほか、立命館とも教材開発などで協力する方針を決定。3月～6月にかけて教材を完成させる計画であったが、COVID-19の影響で会議が開けず、現在は一時中断の状況。各会議の詳細は以下の通り。

a. 7月10日・11日

沖縄側のメンバーに助成金の報告を行った後、今後のプロジェクトの進め方や、用意すべき資料について議論した。教材として(1)沖縄戦を教えるための教員用の教科書的資料、(2)遺品を用いた学習のためのワークシート、(3)使用する遺品のカタログと遺品の取扱説明文(授業のどの部分で、どのような問いを考えるために使えるのか、などに関する簡潔な説明)、(4)遺品とあわせて使用する証言・軍関係資料などの資料集、(5)沖縄の先生方から沖縄戦を学ぶヤマトンチュに伝えたいことのメッセージ、(6)沖縄を訪れた際に訪れるべき場所のリスト、の主に6

種類を用意することで合意し、沖縄側のメンバーは(5)・(6)を重点的に準備する一方、国吉勇応援会側で(1)～(4)の教材部分を用意することとなった。

b. 8月20日・21日

国吉勇応援会側から(1)～(4)の骨子に関する素案を提出し、ヤマトンチュに沖縄戦を教える上で核となる問いかけや問題意識など、教材を貫く大枠の理念的部分に関する議論を行った。「軍隊は住民を守らない」という地上戦の一般的な教訓を強調するのか、それとも「日本は沖縄を捨て石にした」といった沖縄に対するヤマトの差別・抑圧・植民地主義の問題を強調するのか、中国戦線との連続性など十五年戦争全体の流れと沖縄戦との関わりをどのように教えるのか、などの論点が出された。概して「沖縄戦が、あのように民間人の多大な犠牲を出す戦闘になったメカニズムに迫る教材でなくてはならない」という点や、「遺品を用いることで、教え込みではなく学習者が主体的に思考できる教材を目指すべきである」という点では合意できた一方、沖縄戦から浮かび上がる論点の特にどの部分を強調すべきかと言ったことにおいては必ずしも合意には至らなかった。加害責任や差別の問題を強調しすぎてはヤマトンチュの学生の拒絶反応を招くのではないかという懸念もあり、「どのような問題意識を持って、どのような遺品を使っていくか」については次回以降の課題となった。

8月の会議までで、学習プログラムの大枠の構成は決定し、合計最大4時間分のプログラムを作ること、その4時間の内訳は「(1)琉球史・沖縄戦前の沖縄の事情・太平洋戦争概略の1時間、(2)遺品を用いて考える沖縄戦学習の2時間、(3)沖縄を訪れた後の事後学習の1時間」とすることが決定した。

c. 11月27日

国吉勇応援会側から具体的な授業プランを提示し、それを参照しつつ、どのような遺品を用い、どのような問いを学習者に考えさせるか、といった点を議論した。沖縄平和ネットワークの北上田先生からも授業案の提示があり、国吉勇応援会側から提示された案と比較しながらの議論となった。北上田先生の案は、同じガマから出土した複数の遺品を提示し、「そのガマにどのような人(住民・日本兵・看護師・米兵など)がいて、どのような行動をしていたか」を考えさせることで、当時のガマの状態を迫体験させるというものだった。対する国吉勇応援会側から提出した案は、「日本軍が沖縄住民の生活に入り込み、住民の戦闘協力を強いつつ、地上戦が始まると壕迫い出し・住民虐殺といった形で沖縄住民の犠牲を前提とした作戦を展開した」という論理のシナリオを前提として、その証拠として遺品やその他の歴史資料を使っていくというものであった。会議では、「遺品を用いて考える」ということを主軸に置くことの重要性が指摘され、あらかじめ決められた論理を証明するものとしてよりは、むしろ学習者が自由に思考・議論するための題材として遺品を用いることの重要性が指摘された。遺品を用いることで、教え混みの平和学習を避けなければならないという問題意識を共有し、改めて授業案を練り直すことで合意した。民間人の遺品と手榴弾などの武器が特に象徴的な遺品として使えるのではないかという話になり、それらを中心に2案ほど授業案を作る方向でまとまった(その後の関西での議論を通し、現在は両方の案を統合した仮の授業案が出来ている。詳細は「(4)成果物途中経過」のセクションを参照)。

高教組がコンタクトを取った3名から、ヤマトンチュの学習者に対するメッセージが寄せられた他、高教組の大城先生から12月に模擬授業が出来るとの報告があった。沖縄の方々の生の声を取り入れつつ、12月以降に具体的なワークシートなどの教材を練っていくことで合意した。

d. 12月24日

那覇商業高校にて、高教組の大城先生が手榴弾・砲弾を用いた模擬授業を行った。授業前半はワークシートの穴埋めをする型式で、沖縄における皇民化政策や、中国戦線と沖縄戦との繋がりなどを学びつつ、十五年戦争という帝国主義的全体主義戦争の中の一コマとしての沖縄戦がどのように作られていったかについて、歴史的な解説が行われた。後半では、陶器製手榴弾と米軍が用いた砲弾との重さの比較を皮切りに、戦争体験者の証言や、

投降ビラ・戦陣訓などの歴史資料を基に、「もし生徒たち自身が沖縄戦を体験していた場合、米軍に追い詰められた状態で、どのように行動するか？」について、ジグソー法を活用したグループワークを行った。ワークの中では、日米間の圧倒的な物量・情報の差、また戦陣訓の徹底等による投降への恐怖などがある中で、生き延びることを選択することの難しさを実感して貰った。沖縄戦の証言の中には、当時は自決を真剣な選択肢として捉えていたといったものも多いが、生徒たちは遺品の比較と資料の検討とを通し、いかに当時自分たちと同世代の若者だった戦争体験者の方たちが自決に仕向けられたかを追体験出来たようだった。

この模擬授業以降、国吉勇応援会側でも 12 月・1 月の間に議論を重ね、遺品を用いた具体的な授業進行・問いの立て方や、それに対応する資料の絞り込みなどを行った(詳細資料は別途添付)。3 月以降、これをもとに沖縄側のメンバーと調整し、具体的な教材作成(現場の教員が使いやすいように、授業案としての体裁を整えることを含めて)を行う予定だったが、COVID-19 の影響で会議が開けず、現在は国吉勇応援会側で作成した暫定的な授業案がある段階でプロジェクトは中断している。

e. 2 月 19 日

那覇市立若草中学で、遺品を使っの沖縄戦の授業を行った。若草中学では学校全体で平和学習に取り組んでおり、その核に中学 3 年春の沖縄現地学習を中心に沖縄戦の学習を行っている。事前学習に 10 時間と時間を十分時間をとり、16 世紀の琉球処分から始め、江戸時代における日中両属下の植民地支配から、近代帝国主義へと成長していく中で沖縄が置かれた地位など触れるなど、太平洋戦争から沖縄戦だけを取り出すのではなく、その背景にあった沖縄の歴史を丁寧に学ぶようにした学習プランを実践してこられた。

今回依頼のあったのは、遺品を使いながら沖縄戦の実相について学ぶ機会が欲しいという事であった。

全員を対象にした授業が 1 時間(体育館)、その後、クラスごとに分かれて遺品展示を見学という事での依頼であった。120 人対象で 40 分ほどであったので、パワーポイントを使うのが適当と考え、いくつか、問いを挟みながらの展開となった。まず遺品から入り、何なのか、生活用品と武器の両方を提示しつつ、どうして両方が戦場で混在しているのか、遺品の出てくるガマとはどんな場所か、などと発問を加えつつ授業。120 人の中で答えるに勇気がいることだがよく応えてくれた。ただ、丁寧に聞いていると時間が足りなくなり、「戦場になるとは」と「日本軍による沖縄差別」の二つ考えてもらうのはやや困難。まして、その背景となるとこの配当では無理。その後、クラスごとに、10 分ぐらい展示した遺品を見てもらった。圧倒的に衝撃のあったのは、やはり砲弾の断片、「どのように死ぬのか」「戦場というもの」について息をのんでいた様子が見て取れた。

生活用具や医療品などは丁寧な説明があればよくわかったようで、遺品展示はみな本当にひきつけられていた。先生方も 8 人ぐらい参加していただいたが、みな手近での遺品は初めてで遺品の教材としての大切さを痛感した。遺品を見てからの方が授業はやりやすい気がするが、一方、授業を聞いていたので遺品を見る目が違ったともいえる。小さな人数で遺品を見ながらするのが一番と思う。

f. 2 月 27 日

立命館付属校・平和ミュージアム 平和教育委員会との連携会議を実施。立命館国際平和ミュージアムでは、立命館付属校の先生方と平和教育委員会を定期的に開き、平和ミュージアムでの展示やミュージアムを利用した平和学習の取り組みを行っている。付属校は小～中高で 5 校ある。平和学習で沖縄へ行く附属校が 3/4 校あることや、平和ミュージアムからの依頼もあって、一昨年度より遺品を使って行う沖縄戦学習プログラムの開発に対し、私たちのプログラムと連携し協力していただけることになった。各附属校平和教育担当教員、ミュージアム担当者、大学の研究者といったメンバーが参加して、「遺品から学ぶ沖縄戦」への取り組みの会議をしていただいた。

倉石の方から、「国吉勇応援会」の活動、各地での展示会や授業などについて、遺品を見てもらいながら説明。沖縄問題への関心はどの附属校も高く、とくに遺品を使う授業の可能性については極めて積極的で、私どもの会

の活動もご存じであった。北海道の附属を除き、関西の3つの中学校はいずれも、今年度には沖縄での平和学習を企画しており、今後、そのための事前学習のプログラムや、来年度、遺品を使つての授業を西尾もしくは倉石がこの3校で実施するという事になり、予想以上の関心でうれしい成果であった。

(なお、ここまで来ながら新型コロナの問題で、平和学習そのものの実施や今後の授業計画のため、残念ながら現在日程がストップしている)

(4) 成果物途中経過(詳細は別途添付の資料をご参照下さい)

ここでは特に国吉勇応援会側で主導的に用意することになっていた4項目に関する進捗を報告する。

a. 教科書資料

1限(太平洋戦争概説・沖縄戦概説)は、大筋は完成。琉球史・沖縄の戦前史についての記述が未完。2限・3限(遺品を用いた学習)は、火炎放射の影響を受けた遺品、民間人の遺品(タンスの部品等)、手榴弾など多種の遺品を比較する形で沖縄戦の実相に迫る筋書きは完成している。この先、資料を絞り込み、教員が使いやすい体裁にまとめていく作業などがさらに必要である。4限(修学旅行の事後学習と沖縄の戦後史)の部分にはまだ手が及んでおらず、早急な着手が必要である。

b. ワークシート

教科書資料に附属する設問という形で、ワークシートの大きな流れは考えている。実際、ワークシート現物を作っていくのは教科書資料がある程度完成し、使用する証言・歴史資料の絞り込みが進んだ段階になるので、ワークシートの作成のためにも教科書部分の完成が急がれる。

c. 遺品カタログ

「(1)遺品の名称・(2)出土場所・(3)遺品に関連する発問・(4)その発問に対応し、遺品から推測できる事項・(5)授業でその遺品を使用する意義」の5項目からなる簡単な遺品のカタログの案は完成している。これは教員が授業の中でピンポイントに遺品を使用する際の手引きのような役割を果たすものなので、教員がどのような遺品を使用したいのかを改めて見極め、リストに何を盛り込むのか精査していく必要がある。あわせて遺品の写真撮影も概ね完了しており、遺品の現物がなくても写真を見ながら議論を出来るような状態を整えている。

d. 証言・資料集

昨年夏以降のリサーチで、教材に盛り込める証言や歴史資料の候補リストは概ね完了しており、この先は教科書部分やワークシートの作成と対応させながら、資料の選別を行うことが求められる。どのような資料が教材として効果が高いかなどは、現場教員からの意見を踏まえて検討する作成があり、今後の会議の中で絞り込みを進めていくつもりである。

(5) COVID-19 と今後

先述したとおり、3月以降会議が開けていないため、具体的な教材を確定していく作業が全く行えていない。その間、西尾が卒業論文作成に向けた個人的なリサーチプロジェクトとして沖縄県内で平和教育に関わる教員や学生ガイドからのインタビューを行っており、その過程で2019年内の当プロジェクトメンバーとの議論だけでは判然としなかった論点が、よりくっきりと見えてきた。例えば、「軍が住民を動員した」という問題の一般的な恐ろしさ(「沖縄住民だから」と言うわけではなく、軍隊そのものを持つことの危険性)と住民の生活圏内に基地が存在する沖縄の現状との繋がりを考えさせることの重要性や、沖縄に対する差別や植民地主義の問題を直接扱うことの難しさ(特に初めて沖縄戦を学ぶ生徒のことを考えれば、入口が日本の加害性では余計な拒絶反応を起こ

してしまうリスクに配慮する必要がある)、さらに証言を単なる教材として消費し証言者が証言に至るまでの葛藤などを無視してしまう危険性についての問題提起を多数受けた。ここでインタビューした人は、当プロジェクトが対象としている中高生に対する平和学習を現在進行形で行っている方たちであり、その方々からの意見を踏まえ、1月までに作成した仮の授業案を改めて練り直す必要があると感じている。

COVID-19 の状況が治まり次第、沖縄側のメンバーとの会議を再開し、できるだけ早めのキット作成を目指したい。それまでは国吉勇応援会側として、会議が再開できた際に提出する仮の授業案を洗練させるなど、関西で出来ることを出来るだけ進めていきたいと思う。ヤマトにおいても平和学習の機会は減らされており、模擬授業なども難しい状態ではあるが、少数ながら出前授業や講演に呼んで下さる学校もあるので、そうした学校でアンケート調査を行うなどし、授業案を出来るだけ洗練させる工夫をしたい。

1 限

◇ 太平洋戦争の始まり

第一次世界大戦後、国際的な協調・軍縮の流れが生じた一方、軍部の中では軍縮に反対する声も強まっていた。1929年の世界恐慌の影響で欧米列強が保護主義的な経済政策を採るようになると、資源を持たない日本は特に大きな影響を受け、海外進出によりその難局を打開しようとする流れが生まれた。1931年の満州事変以降、中国戦線での戦争を始めた日本は、物資不足による戦局の行き詰まりに直面し、1940年以降仏印進駐を開始した。結果、アメリカとの関係はさらに悪化し、1941年12月、日本が真珠湾を奇襲して太平洋戦争が始まった。「大東和共栄圏」の建設を目指してアジア・太平洋地域の植民地化を進めようとした日本であったが、1942年6月のミッドウェー海戦での敗退以来劣勢が続く、日本本土への米軍の来襲が必至の状況となった。

◇ 太平洋戦争と沖縄戦

沖縄戦は、太平洋戦争末期に沖縄で日米両軍が衝突した地上戦であり、現在の日本の領土において、住民を大規模に巻き込んだ地上戦体験としては唯一のものである。東南アジア・太平洋戦線で米軍が優勢となり、本土決戦の可能性が高まるのを認識した日本軍は、決戦までの準備時間を稼ぎ、また本土上陸前に米軍の戦力を消耗させる必要に迫られた。1944年夏以降沖縄に配備された日本陸軍(第32軍)は司令部を琉球の文化的象徴であるはずの首里城の地下に置き、沖縄での展開を開始したが、「一木一草と雖も之を活用すべし」との方針の下で、公共施設から家畜・食糧まであらゆるものを、時には不法・暴力的な手段で徴発した(→資料(1)~(3))。女性や学生を含む住民の多くは陣地構築など軍の活動に徴用され(→資料(4)・(5))、また住民が民家の一部を軍人の宿泊場所として提供することを求められる場合もあったため、地上戦開始前から沖縄では軍民が混在する状況であった。

資料(1) 「牛島司令官訓示」(1944年8月31日)

(前略)

惟ふに曠古の危局に直面せる皇国が驕米を撃滅して狂瀾を既倒に回すべき天機は今や目捷(ママ)の間に在り而して軍の屯する南西諸島の地たる正に其の運命を決すべき決戦会戦場たるの公算極めて大にして実に皇国の興廃を双肩に負荷しある要位に在り

(中略)

第五 「現地自活に徹すべし」

極力資材の節用増産貯蔵等に勉むると共に創意工夫を加へて現地物資を活用し一木一草と雖も之を戦力化すべし

第六 地方官民をして喜んで軍の作戦に寄与し進んで郷土を防衛する如く指導すべし

之が為懇ろに地方官民を指導し喜んで軍の作戦準備に協力せしむると共に敵の来攻に方りては軍の作戦を阻

碍せざるのみならず進んで戦力増強に寄与して郷土を防衛せしむる如く指導すべし

第七 「防諜に厳に注意すべし」

資料(2) 「帝国陸海軍作戦計画大綱」(1945 年 1 月 20 日)

第三 各方面作戦指導の準拠

其一 皇土要域に於ける作戦

一 皇土要域に於ける作戦の目的は敵の進攻を破摧し皇土特に帝国本土を確保するに在り

四 皇土防衛の為の縦深作戦遂行上の前線は南千島、小笠原諸島(硫黄島を含む)、沖縄本島以南の南西諸島、台湾及上海付近とし之を確保す。右前縁地帯の一部に於て状況真に止むを得ず敵の上陸を見る場合に於ても極力敵の出血消耗を図り且敵航空基盤造成を妨害す

五 帝国本土、南鮮及上海附近に対する敵の来攻上陸に際しては陸海空戦力を総合發揮して之を排擠撃滅す又千島、小笠原、南西諸島及台湾に在りては敵の進攻に先だち予め所要の戦力を投入して作戦準備を整ふると共に機を失せず所要の航空戦力を集中増加して之を撃破す

資料(3) 「石部隊 石兵団会報 第 76 号」(1944 年 10 月 21 日)

六、軍会報中必要事項

- 1 空襲後那覇宿営部隊は各々空家に宿営しあるも無断借用し或は釘付せる戸を引脱し使用しあり又家中の物品を勝手に持出し使用しある部隊あり 民間においては「占領地に非ず無断立入りを禁ず」等の立札を掲げあり 注意を要す
- 2 混雑に紛れ鶏、豚、等を無断捕獲し食用に供しある部隊あり 民間より苦情ありたるを以て注意のこと
- 3 性的犯行の発生に鑑み各隊此種犯行は厳に取締られ度
- 11 某隊に於て家畜を調査し将来全部軍に於て徴発すべき旨を漏し為に民間に於ては小豚迄殺し食用に供しありと各隊は注意し地方人に不用意なる言動をなさざること

資料(4) 「独立混成第 15 連隊第 2 大隊本部 軍官民合同警備演習実施計画」(1944 年 11 月 25 日)

一、計画

教育訓練は陣地作業の進捗に伴ひ併行せしむるの上旨に基き情勢の推移に伴ひ即時即応の態勢を以て自信満々潑刺たる戦斗を遂行せしむると共に地方住民特に防衛隊、警防団には軍と渾然一体となり自主積極的に国土防衛の大任を完うする観念を養成し其の技倆を向上し他の住民には非常の際整々たる退避避難の行動に遺憾なからしむ

資料(5) Simon Buckner の日記

“The 3rd Mardiv (Marine Division) continued to advance northward against negligible resistance. A few Okinawans had been given guns. They don’t know either how to fight or how to surrender. They shoot a few rounds and go into caves but won’t come out and have to be killed. The civil population remains docile.” (Buckner, *Seven Stars*, April 5th, p.33)

→ 日本軍は沖縄をどのような場所だと見做していたのだろうか？

◇ 沖縄が戦場に

1945 年 3 月、本土攻撃の足がかりとして沖縄を占領することを企図した米軍は、当時沖縄に残った県民の人口を上回る総勢 54 万人(後方補給部隊を含む)の勢力で沖縄に迫った。米軍は 3 月 26 日に慶良間諸島に上陸したのに引き続き、4 月 1 日に沖縄本島の中部海岸に上陸、3 ヶ月以上に渡り沖縄本島全体を巻き込んだ地上戦が始まった。迎え撃つ日本軍は、第 32 軍の総勢が約 10 万人、しかも 1944 年 12 月～1945 年 1 月にかけて当時の地上兵力の三分の一を占めた精鋭の第 9 師団が沖縄戦直前に台湾に移されたまま沖縄への戦力補充がなされなかったため、不足する兵力を沖縄で防衛招集した計 2 万人ほどの民間人で補給するという状態だった(→資料(6))。さらに、本土決戦を見据えた持久戦を主張する陸軍と、沖縄決戦を主張する海軍との間で一貫した作戦思想を確定することが出来なかった。最終的に陸軍の時給戦略が優勢になってからも、大本営本部からの十分な物資支援もなく、物資不足は明らかであった。

米軍上陸前、沖縄では県外・もしくは沖縄本島北部のジャングル地帯への疎開が急がれたが、米軍上陸時でも大半の県民が中南部に集中していた。米軍は上陸後、沖縄本島を南北に分断し地上作戦を開始した。北部は上陸後 2 週間で占領され、食糧不足やマラリアが主要な戦争体験となった。一方中南部では日本軍が住民を巻き込んだ持久戦略を採った結果、膨大な住民の犠牲を生む激戦となり、戦死者の割合が当時の人口の半数を超える字もあった。中南部にはガマと呼ばれる自然洞窟に加え、日本軍が沖縄住民を使って構築した壕が集中していた。住民はガマに身を隠し、地上戦の中を生き延びようとした一方、日本軍はガマ・壕を避難場所や軍事施設などとして利用しながら戦闘を長期化しようとしたため、両者はガマを巡り競合する関係になった(→タンス・食器など住民関連の遺品を使い、ガマが元々住民の生活の場であったこと、またその場が軍事化されたことを考えて貰う)。さらに、防衛隊・学徒隊・従軍看護隊(→注射針・注射器などは医療行為の痕跡)、さらには軍が設置した「慰安所」の「慰安婦」(→資料(7)～(9))などとして軍に直接組み入れられた住民もあり、沖縄戦は住民の生活の場全体を戦場にしながら戦われた。

※主な市町村の戦没者率(「沖縄県史」第 2 章第 3・4・5 節を参考に作成)

市町村名	戦没者数	当時の人口	戦没者率
読谷山村	2,746	16,405	16.7%
北谷村	2,072	15,580	13.3%
宜野湾村	3,982	13,346	29.8%
中城村	5,643	17,820	31.7%
西原村	5,026	10,427	48.2%
浦添村	4,679	11,369	41.2%

那覇市	7,584	65,765	11.5%
首里市	7,388	17,537	42.1%
真和志村	4,873	16,884	28.9%
小禄村	2,917	9,723	30.0%
南風原町	4,016	8,899	45.1%
豊見城村	3,851	9,498	40.5%
糸満町	1,768	6,872	25.7%
真壁村	2,055	4,400	46.7%
摩文仁村	1,451	2,292	63.3%

※特に戦没者率の高い字

字名	戦没者数	当時の人口	戦没者率
嘉数(宜野湾)	380	704	54.0%
我如古(宜野湾)	431	850	50.7%
幸地(西原)	653	1161	56.2%
我謝(西原)	711	1,084	65.6%
安波茶(浦添)	157	209	75.1%
宮城(浦添)	309	437	70.7%
前田(浦添)	551	934	59.0%

資料(6) 八原の手記

“第 32 軍首脳部はマリアナ戦失陥後、特にわが海空軍の戦力にさほど期待をかけていなかった。大なる損傷も受けず上陸したる敵をまともに軍が受けた場合、果たして勝算があるか、甚だ疑問といわざるを得ない。彼我の地上戦力比は師団数において三対一以上、物的戦力比は十対一以上となる。さらにアメリカ太平洋艦隊の主力とその空軍の戦力を加算すれば、彼我の総戦力比は二十倍にも三十倍にもなる。かかる強大な敵に対し攻勢をとり、果たして勝算があるのか。” (p.54)

“日本の運命も見え透いている。自己の運命も決定的である。軍司令官や参謀長は、人ごとにそしてあらゆる機会に、沖縄必勝を説法されるが、これはおそらく軍統率上の便法であり、沖縄県人の民心安定の配慮に出でるものであろう。戦勝はこれを信ずる者に帰すというが、それは勝敗の公算が浮動しある場合の話で、わが第 32 軍の如き状況ではない。” (p.93)

“まさに戦いに臨まんとするにあたり、今や中央に、兵力の増派を望むことは不可能になった。この上は創意工夫を凝らし、与えられた兵力を質的に強化する方策を講ずべきである。陣地編成の完璧、築城の徹底強化、訓練の精到、そして一木一草といえども、これが戦略化を図るよう全力を傾注しなければならぬ。私は、これまでしばしば沖縄防衛軍十万とやってきた。確かに総数は約十万であった。しかしほんとうに戦闘部隊として、内地から派遣されたのは五万に満たなかった。すなわち第 24 師団、第 62 師団、混成第 44 旅団、軍砲兵隊等

である。このほか、海軍陸戦隊の辛うじて銃の操作を知る者約三千があった。あとは軍後方部隊が約二万、沖縄における防衛招集者陸海合し、約三万である。総数十万と称しても実際戦闘し得る者は多く見積もって五万であり、他は銃を持たない人々であったのである。これらの混然、雑然たる部隊、人員を、純然たる地上戦闘要員に仕向けようというのが軍の狙いであった。” (pp.122-123)

資料(7) 「飛行場設立作業開始に当り与ふる訓示」(1944年5月7日)

九、徳操の堅持に努むべし

本事項は既に那覇上陸第一歩に注意し爾後再言したるも今回は特に勤労者の中に一部婦女子ありて直接之と接し作業を実施すること多きを以て更に一層徳操を堅め断じて疚しき行為あるべからず 重ねて率直に云ふ一時の性慾に駆れて一般婦女子と性交を交へ或は之に性交を迫るとか甚だしきは之を強姦する等は断じて之を許さず断然嚴重に処断するを以て本職の設備する特殊慰安婦の外嚴に之を慎むべし 即ち姦奪程軍隊の威信を害し民心を離反せしむるものなく百の善行も一瞬にして水泡に帰するを以てなり宜しく上下相戒めて断じて之なきを期すべし

資料(8) 「石部隊 石兵団会報 第56号」(1944年9月17日)

五 在仲間後方施設を左の如く称呼し9月20日より営業を開始す

所在地	名称	所在地	名称	所在地	名称
安和茶	見晴亭	経塚	観月亭	安和茶	軍人会館

資料(9) 「石部隊 石兵団会報 第84号」(1944年11月12日)

五、各隊は空爆に依り避難し来り慰安婦として新に採用しある者にして既に球軍と慰安婦として契約しあるものあらば調査の上11月14日迄左記様式(※略)に依り報告のこと

◇ 被害の拡大

人員・物資両面で明らかに劣勢であったにもかかわらず、「皇土防衛」「国体護持」に拘泥した日本軍は、「軍官民共生共死」の方針を採り、防衛隊・学徒隊などとして学生を含む正規軍人ではない沖縄住民を超法規的に動員したり、物資・避難場所の供出を強制したりしながら戦闘を継続した。5月22日、首里城地下の第32軍司令部が米軍によって包囲されても、日本軍は戦闘継続を選んだ。日本軍が首里城地下の司令部を放棄し、沖縄本島南部への後退を開始した5月下旬以降特に、日本軍がガマを巡って競合する沖縄住民を犠牲にする状況が顕著になり、犠牲者数は大幅に増加した。さらに、勤労働員などを通して軍事機密を知った日本軍が米軍に機密を漏らすことを怖れた日本軍(→資料(10)~(12))は、「戦陣訓」によって住民が米軍に投降するのを厳禁した。米軍に追い詰められた沖縄住民は最悪の場合居合わせた日本軍によって直接殺されたほか、「米軍の捕虜になれば激しい暴行・強姦の末に惨殺される」という虚偽のプロパガンダによって「自決」に仕向けられたりした(→資料(13)・証言(1)~(5))**(→手榴弾が住民にまで普及し**

ていたことから、住民の自決が促された状況を考えて貰う。

一方の米軍は、日本軍が沖縄住民の間に混ざり込んでしまった状況を鑑み、学徒兵や民間人がいる壕も含め、投降しない壕を全て攻撃する掃討作戦を採った。壕には火炎放射・毒ガス攻撃を含む、「馬乗り攻撃」と呼ばれる容赦ない攻撃を加えた**(→火炎放射の痕跡の残る遺品、またガスマスクなどが壕への攻撃の実情の証左となる)**ほか、壕の外では昼一枚に 100 発の弾丸が撃ち込まれたほどの「鉄の暴風」と呼ばれる艦砲射撃・機銃掃射**(→砲弾断片の実物で威力を実感)**を行い、島の地形が変わるほどの惨状を作り出した。

この地上戦は、犠牲者総数が約 20 万人、特にそのうち約半数に当たる 9 万 4 千人が沖縄住民(それに加え、「軍人・軍属」に数えられている沖縄県民の中にも、正規の徴兵を経ずに徴用された学徒隊員などが含まれている)で占められるという結果になったが、それは日本軍が沖縄を本土を守るための「捨て石」にしたために作り出された惨劇であった。

資料(10) 「独立重砲第 100 大隊 陣中日誌」(1944 年 8 月 24 日)

三、防諜について左記事項の徹底を望む

1. 住民に要求することは其の目的等は絶対に話すべからず
2. 陣地構築或は諸施設に使用する徴用労務者等についても勉めて陣地を秘匿する著意必要なり
3. 電話に固有名を用ふべからず

兵の一般民に接触し素りに談話することを禁ず県民の指導を誤り軍の威信を損じ又防諜上適当ならず

資料(11) 「球軍会報」(1945 年 4 月 9 日)

五、爾今軍人軍属を問はず標準語以外の使用を禁ず
沖縄語を以て談話しある者は間諜とみなし処分す

資料(12) 「鹿山文書」(久米島部隊指揮官、1945 年 6 月 15 日)

具志川村仲里村村長・警防団長殿

三、敵は謀略宣伝を開始する算大なり

依って敵が飛行機其の他よりする宣伝「ビラ」撒布の場合は早急に之を収取扱纏め軍当局に送付すること
妄に之を拾得私有し居る者は敵側「スパイ」と見做し銃殺す

資料(13) Simon Buckner の日記

Two men who killed their wives because the Japs told them they would be raped to death became very hostile to the Japs when they surrendered themselves and found this not to be true. One attacked a Jap prisoner.” (Buckner, *Seven Stars*, April 5th, p.33)

証言(1) 大城政英さんさんの証言

大城政英さん(当時 24 歳、浦添在住)が 5 月上旬、那覇市天久にある壕にたどり着いたとき、中にいた日本兵に誰何された。避難民だと答えると、スパイ呼ばわりされ、動いたら撃つぞと脅された。出てきた 3, 4 人の日本兵に上半身裸にさせられ、電話線で後ろ手に縛られて拘束された。軍刀で斬られそうになったが、偶然顔見知りの日本兵がいたので命を取り留めた。しかし同時期に捕えられた別の住民は保証人がいなかったので、壕の外に連れ出されて拳銃で射殺された。抗議すると、「沖縄人は皆スパイだから殺せという命令が出ている」といわれ、話にならなかった。(NHK スペシャル『沖縄戦全記録』 pp.137-138)

証言(2) 渡辺憲央さんの証言

“1945 年 5 月末ごろ、沖縄本島南端の日本軍将兵の集まる地下壕に、身なりのいい女性が迷い込んできた。壕内にいたほかの沖縄住民の汚れた衣服とは異なり、こざっぱりした服装だったために米軍のスパイだと怪しまれて、壕の奥で小銃で処刑されたという。米須の野戦病院壕でも親類を探しに来た学生服姿の少年もまた、「怪しい。スパイだ」とされ、日本兵がその背中を小銃で撃ち抜いた。” (国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」 pp.88-89)

証言(3) 深沢敬次郎さんの証言

戦陣訓は「軍人の戒めであったはずだが、いつしか女子や子どもにまで浸透することになり、半ば強要されるようになってしまった(中略)勝ち戦のときはなんでもないことであっても、負け戦になると敗因がいろいろ詮索され、スパイ探しが始まった」 (国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」p.134)

証言(4) 普久原千代さん・我那覇初子さんの証言

沖縄本島南部・銘苅の女子青年団員だった普久原千代氏(注記略)と幼馴染の我那覇初子氏(注記略)は、1945 年 5 月上旬、駐屯部隊のナカジマという名の下士官から手榴弾を二つずつ渡された。「一発は敵に投げ、もう一発は自爆用に使いなさい」と言われた。捕虜にならずに自決せよ――、という軍による徹底指導の現われだった。住民にとってその手榴弾配布は自決の「命令」そのものだった。我那覇氏の場合は、銘苅からさらに南方の真栄里で「集団自決」を図り、10 名ほどいた家族のうち 7 名が軍の配った手榴弾で爆死した。(国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」p.134)

証言(5) 新垣峯子さんの証言

“(注・石部隊の女子挺身隊になって)4 月 1 日、米軍の北谷上陸が伝えられると、一人に二個ずつの手榴弾が手渡され、いざという時の為にと、暗に自決の覚悟を余儀なくされた。” (中城村史 p.136)

◇ 沖縄戦の結末とその後

6月23日、日本軍の牛島満司令官・長勇参謀長が自決し、沖縄戦の「組織的戦闘」は終了した。この日は沖縄の「慰霊の日」となっているが、司令官は「最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」、つまり個々の兵員に戦闘の継続を命じる言葉を残して自決したため、6月23日は戦闘終結の日にはならなかった。その日以降は統制を失った敗残兵が住民を虐殺・掠奪する状況となり、司令官の命令によって不要な犠牲がさらに増加した。最終的な降伏文書の調印は日本本土より遅い9月7日にずれ込んだ。

沖縄戦後、沖縄は1972年まで米軍の占領地となった。住民が米軍の収容所に集められている間、彼らの土地は米軍基地の用地として接収された。そのときに作り出された沖縄への基地の集中は、沖縄が日本に「復帰」し、また戦後70年以上が経過した現代に至っても全く改善されていない。



2 限

◇ 沖縄戦遺品と国吉勇氏

沖縄戦は沖縄という島、またその住民全体を巻き込む地上戦となった。その爪痕は、戦後 75 年以上が経過した今でも沖縄に残り続けている。その顕著な一例が遺骨と遺品である。沖縄戦当時、ガマと呼ばれる自然洞窟や、構築壕の中には、地上戦の惨禍から逃れようとした沖縄住民の他、陣地・避難場所・野戦病院のための場所を求めてガマ・壕に入った日本兵や沖縄で徴用された兵・学徒たちが混在していた。米軍はそれらのガマ・壕に対して掃討作戦を展開し、ガマ・壕の中で亡くなった住民・兵士も多かった。そんな住民・兵士の遺骨・遺品は戦争が終わってからもガマ・壕の中に残されたままになっていた。沖縄の人々はそのような遺骨を弔うことをとりわけ重要視しており、「沖縄の復興はまず戦没者の遺骨の収集・納骨から」と言うほどであった。

那覇市出身の国吉勇氏は、自らも北部への疎開を経験した沖縄戦体験者であり、戦後約 60 年間ほぼ毎日壕やガマを巡り、沖縄戦犠牲者の遺骨・遺品を収容してこられた方である。この学習キットで使われている遺品は全て、国吉氏が収容し、現在まで自力で保存されてきた十数万点にものぼる遺品の一部であるが、全て遺骨が出る、つまり戦争の犠牲となった方が滞在していたガマ・壕の中から掘り出されたものである(→壕の中に遺骨・遺品がある様子の写真)。「遺骨を日の当たるところに出して弔ってやりたい」「遺品も持ち主の宝物だから残して、遺族に返すか、沖縄戦を語るのに使いたい」という思いに突き動かされた国吉氏は、高齢を理由に引退されるまで収容作業を継続された。

元々住民が暮らしていたガマも含め、多くのガマ・壕が軍によって使用されたため、出土する遺品全体の中では手榴弾・薬莢・軍人の装備の他、医療器具などの日本軍関連の遺品が大多数である(→国吉氏の資料館の写真)。一方で、タンスの部品・食器・和裁の道具・かんざしなど、ガマの中での住民の生活の痕跡を示すものも少しだけ出土している。沖縄戦の最大の悲惨さは住民を巻き込み犠牲にする地上戦となった点にあるが、その住民の遺品の少なさは、沖縄戦に関する語りを日本軍中心のものに限定し、住民の体験を矮小化してしまう怖さを孕む。しかしなお、住民に関連する数少ない遺品を、その他の遺品と比較しながら用いることで、私たちは沖縄戦遺品をガマ・壕の中で、人々がどのように生き、そしてなぜ、どのように犠牲にされたかを語る「語り部」として活用できるのではないだろうか。

◇ 遺品を用いた考察

まずは壕の中にいた人々がどのように犠牲になったのかを見てみたい。次に示す遺品は、米軍の攻撃を受けた壕から出土した遺品である。

遺品 火炎放射の影響を受けた遺品(乾パン・薬瓶など)

→ 米軍はどのような攻撃を仕掛けたのだろうか？その攻撃を受け、壕はどのような状態になったのだろうか？

証言(1) 伊智万里子さん(当時 21 歳、当時浦添市小湾在住)の証言

“もう 150 メートル前には敵の戦車がいるの。その戦車砲で入口をぶち壊すの。1 間(1.8 メートル)か 2 間の入口になるの。そうすると陣地の中が全部照明弾で見えるでしょ。戦車砲でだんだん入口が開けられて全部やられる。…火炎放射というのも壕の中にまかれたですよ。兵長だったかな、沖縄のおじさんよ。このおじさんがもう生きていて焼けるの。パチパチして「隊長熱いです、こっちも焦げますよ」と言って、(隊長が)「ご苦

「苦労だった、後先だ、後先だ、ご苦労さん」これだけさ。もうこれが焼けるのを見て、みんなうちなんかもあと何時間待ったらうちの番かねと。」 ※5月中旬の体験（「NHK スペシャル 沖縄戦全記録」pp.130-131）

証言(2) 翁長安子さんの証言

“このコの字型の奥行き 20 メートルほどの壕内には、20 名あまりの兵士と 7 名の女性がいたが、戦車砲の直撃団がボォーンと壕内に飛び込んできた。そして、引き続き火焰放射を浴びせられ、砲弾よけの米俵や杵材に火がついた。逃げる間もないあっという間の出来事で、壕入口の兵士の集団は、弾にやられ、火炎に包まれた。“あつい！あつい！”という兵士たちの断末魔の声が、狭い壕内にこだました。安子さんの身体にも火がついた。「そのとき雨模様だったので、私は雨合羽を着けていました。そして、大金庫のうしろのほうにいたので、直撃は免れたが、うめき声と煙がひろがり、たいへん熱くなってきました。そして、私のカップの左袖口に火が燃え移ってきました。“あつい！”と思ったとき、永岡隊長が軍刀で(たたいて)消し止めてくれたのです。隊長は、すぐ全員に『防毒面をかぶれ！』と叫んだので、私は背中の防毒面を取り出してそれをかぶり、煙の中でずうっとがまんしていました。】”（「証言・沖縄戦」pp.87-88）

証言(3) 山城寛則さんの証言

“「敵は爆雷とか火焰放射器を壕内に浴びせて、さらに爆雷で壕出入り口を爆破してふさいでしまったのです。壕内は硝煙がたちこめました。ガス弾を撃ち込まれたとも言っていました。防毒マスクを持っている兵隊はそれをはめるが、敗残兵なんかはそういうのは持っていないので、ガスでやられてバタバタ倒れるのです。直接弾に撃たれたのではなく、みんな窒息したんです。(中略)夕方から馬乗り攻撃はやんだが、ずっとガスに悩まされ、死ぬんじゃないかという恐怖感はいへんでした。だが、しだいに出入り口のすき間からガスは出ていき、夜中の二、三時頃やっとガーゼを外して呼吸ができるようになり、ローソクもつくようになりました。その明りの下でまわりを見回したら、私の足元や通路といわず、たくさんひとが寝ているのか死んでいるのかわからない状態でした。それで身体をゆすってみたらみんなガスで死んでいるのです。」この長さ 150 メートル前後もある壕の 5 か所の出入口は全部破壊されていた。生き残った少尉が、生存者を壕の中心部に集め、一本のローソクの下に顔を寄せ合ったら、約 300 人のうち 4,50 人がかろうじて生き延びていた。”（証言・沖縄戦」pp.69-70）

これらの遺品は主に日本軍の物資が米軍の攻撃に曝されたものである。しかし、沖縄戦当時、壕・ガマにいたのは、日本軍関係者だけだったのだろうか？先に引用した証言は既に、住民も壕・ガマの中で米軍の攻撃の犠牲になったことを示している。では、住民は何故日本軍と一緒に壕の中におり、米軍の攻撃を受けることになったのだろうか？

遺品 住民の生活の様子を示す遺品(タンス・ラードの甕など)

遺品 米軍の攻撃の様子を示す遺品(砲弾断片など)

→ 住民にとって、ガマはどのような場所だったのだろうか？なぜ住民はガマの中に避難していたのだろうか？そこに避難しなかったとしたら、どのようなことになったのだろうか？

→ これらの遺品は最終的に「陣地壕」と呼ばれる場所から出土している。そのことは何を暗示するだろうか？

証言(4) 玉城利枝子さんの証言

“祖父は元々、百姓だが、大変器用な人で、その鍾乳洞の一つを、まるで新築家屋のように、立派な部屋に仕上げて、畳を敷き、タンスを並べ、また、その中を流れる湧き水を利用して、炊事や洗濯も快適に出来る程本格的なものに造り上げた。”（沖縄県遺族連合会終戦 50 周年記念『いとせ』 p.361）

証言(5) マツさん(仮名)の証言

“鍛冶屋の火花みたいなヤツと一緒に、ノコギリの刃くらいの大きな破片が飛んでくる”（真尾悦子「いくさ世を生きて 沖縄戦の女たち」p.142）

たとえ直撃を免れても、幅 20cm, 長さ 50～60cm の破片が来て大怪我になるので、砲撃の際は破片が怖かった。地下足袋やズック靴では地面に刺さっている破片を通してしまった。傷口から破傷風になり、昼間にやられたらその晩には高熱と痙攣にうなされることになった上、医者も薬もないので治療の方法がなかった。破傷風でもだえ、手の施しようがない子供を、戦車にひかせるのは忍びないので、後日遺骨を拾いに来る場所を胸に刻み込みながら生き埋めにした母親もいたという。（前掲書 p.147、要約・編集）

証言(6) 松田定雄(当時 30 歳、現地召集)さんの証言

“砲弾の破片なんか大きいんですよ。手のひらの大きさの鉄板ね。もう熱くて火になっているから。バーンって浮くんですよ、首ね、さーっと切れてね。首と胴体が目の前に落ちよった”（「NHK スペシャル 沖縄戦全記録」p.151）

証言(7) 上間ヨシ子さんの証言

“夜通し歩いて東風平部落にたどり着いたとき、まっかな火が、風がさっと行くような感じで私たちの前に落ち、大きな爆発音がしました。そして、私たちの所に大きな破片が火になって飛んでくるので、母は頭にのせていたかごを投げたらそれに破片が当たりました。かごの中のなべが二つにわれ、馬肉の入ったみそは無数の破片でメチャクチャになり、とても食べられそうもないので、全部捨ててしまいました。”（「証言・沖縄戦」p.24）

証言(8) 国場信吉さんの証言

“(砲弾を落とされて)4,5 メートル先に落下と同時に白い火があがったかと思うと、土砂と共に吹き飛ばされ、あとは意識を失っていました。土や石は、2,30 メートル先まで飛ばされるが、私は、それらより重いから 10

メートルほど吹き飛ばされて、落下した所に土砂がふりかかって埋まった状態になるのです。どれほど気を失っていたか知りませんが、意識を取り戻して、土砂の中からむくむくと沖だし、また水を汲もうとしたのです。”（「証言・沖縄戦」p.38）

遺品と証言から、元々住民が避難場所・生活の場として使っていたガマにも日本軍が侵入し、陣地などに作り替えられていったことが判る。では、そのようなガマに元々住んでいた住民には何が起きたのだろうか？さらに証言を探ってみたい。

証言(9) 東野恒和さんの証言

古参兵であるほど、沖縄住民を差別する者が多かったという。壕の中でも、部隊幹部や古兵が安全な場所を陣取り、住民はよしんば壕に入れても、入り口付近に身を寄せ合うのが関の山だった。”（国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」pp.27-28）

証言(10) 運天政和さんの証言

“一〇〇大隊の兵隊たちは幾つかの壕に分散してはあったが、全員を収容しきれなかったので民間人の壕を取りあげて兵隊たちがはいった。地元の人たちが「アイエナー（方言。悲しい時、驚いた時に発する感嘆詞）、ヤマトの兵隊たちに壕から追いだされる」とうったえていたが、どうすることもできず泣く泣く壕から出て行った。追いだされた人たちは石垣のかげに身を寄せていたが、その晩、艦砲にやられた”（「沖縄一中鉄血勤皇隊の記録(下)」p.12）

証言(11) 城間期一さんの証言

“軍隊は堅固な壕にはいっていたが、住民は民家や岩陰にいるほかなかった。住民がちゃんとした壕にはいると、兵隊がやって来て、「軍の命令だ。出て行け」と一括して住民を追いだし、自分たちがはいった”（「沖縄一中鉄血勤皇隊の記録(下)」p.93）

証言(12) カマドさんの証言

6/10頃、無人らしき壕を見つけたが、奥に日本軍が入っており、追い出された。「兵隊が死ぬと沖縄を守ることが出来ない。住民は戦の邪魔だ」といわれて、友軍は沖縄の何を守ってくれるのか、と思ったが彼らに口答えするわけにもいけないので黙って出た。（真尾悦子「いくさ世を生きて 沖縄戦の女たち」p.14、要約・編集）

証言(13) 伊波盛勇(仮名)さんの証言

“伊波さん一家は、もう日本軍の陣地化している大名町への艦砲射撃が激しくなったので父方の本家があった首里の寒川町に避難することにした。(中略)この壕に避難してまもなく、軍刀を持った日本兵が 3 名現われた。伊波さんの一家が悲惨な目にあうのはそれ以後のことであった。「2 人の日本兵が壕内に入ってきて、『出て行け、出て行かないと手榴弾を投げて殺すぞ!』というのです。うちにいた日本兵はやさしかったが、ここではとても怖くて、3,40 名の住民はみんなちりぢりになってしまいました。(後略)」(「証言・沖縄戦」pp.15-16)

証言(14) 新垣シズさん(当時 28 歳)の証言

“私たちが(注・東風平の壕に)避難してから約 19 日後の 4 月 15 日頃の朝、中部から逃げてきたと思われる日本兵(部隊名、氏名不詳)が四、五名入って来ました。日本兵は壕の中に入ると、いかにもじゃま者どもがいるといわんばかりの顔つきで壕の奥へ入って行き、私たちに食糧を要求しました。私たちは持っていたわずかないもとみそを全部日本兵へ差し出しました。日本兵は険しい目をしながら、いもとみそを、ありがとうとも言わないで無造作に受け取りました。日本兵が入って来てからは、壕の中はいっぺんに氷のような冷たいふん囲気が漂いました。その異様なふん囲気に子供たちがたえきれず、ひもじさとのどのかわきも手伝ってワァワァ大声で泣き出してしまいました。この泣き声に日本兵は驚いたのでしょう、日本兵は日本刀をふりかざして、私たちに子供を泣かすなと強い口調で命令しました。しかし、子供たちは泣き止む様子はありません。抱きしめても泣き続けるばかりでした。私は困ってしまい、日本兵をチラッと見ますと、日本兵の形相はいよいよ陰悪で、今にも私たちを殺さんばかりの顔をしていました。その日の夕方近くになった頃、たまりかねたのか日本兵は「われわれだけで米軍と戦うからお前たちは今すぐこの壕を出て行け」と、私たちに命令しました。私は砲弾が雨あられの如く降る中、壕を出ることは自殺するにひとしいから、子供を泣き止ませるので、壕を追い出すことだけはしないでくれるよう頼みましたが、一向に聞き入れてもらえず、私たちは強引に壕を追い出されてしまいました。”(「中城村史 第 4 巻 戦争体験編」(1990)p.87)

証言(15) 多和田シズさん(当時 35 歳)の証言

“6 月 6 日頃、壕を求めて次は摩文仁村字摩文仁に移りました。摩文仁では久しぶりに自然壕を見つけ、そこに落ちつくことにしました。しかしその頃からはみんな混乱状態になり、壕を求めて南へ行く人もおれば、南からやって来る避難民もいるというありさまでした。私達はここが最後の避難壕と思い、頑張っていました。が、四人の日本兵にまた追い出されました。兵隊は、ここはわれわれの最後の決戦場になり作戦上、ただいまから軍が使用する、とっていました。たった四人で、しかも壕に隠れていくさができるかとの疑問をいさきながらも、壕を出ました。忘れもしない 6 月 15 日のことです。”(「中城村史 第 4 巻 戦争体験編」(1990)p.149)

- [先ほどの砲弾断片をもう一度見て]壕を追い出された住民はどのような状況に追い込まれたのだろうか？
- [証言の多さを見て]なぜ壕追い出しは沖縄の人にとってこれだけ印象に残る出来事だったのだろうか？

日本軍がガマに侵入し、軍民混在の戦場が作り出された結果、ガマに残っても、ガマから出ても米軍の攻撃に曝されるという状況が作り出されたのである。

- 米軍はなぜ住民がいるかもしれない壕にまで攻撃を加えたのだろうか？
- 沖縄戦で住民の犠牲があれほど膨大になったのは何故だろうか？



3 限

2 限では、住民が日本軍の作戦・行動により、死に追いやられていったこと、それにより住民の犠牲が膨大になってしまったことを学んだ。実際、今は「激戦地」の象徴とされている沖縄南部も、日本軍が首里城の陣地を放棄して南下するまでは「平和郷」であったとの証言もある。戦場が島全体に広がったこと、また住民の犠牲が膨大になったことは、日本軍の選択の結果なのである。

証言(1) 武富良浩さんの証言

“ビンに着いてびっくりしたことは、周囲に手つかずの砂糖キビ畑が残っていたことだ。砲弾は落ちてこないし小鳥もさえずっていて、平和郷そのものだった。部落の人たちは家で炊事をしている様子で、かまどから立ちのぼる煙が見えた。そのうち、今日は那覇の波の上祭の日(5月17日)だと気がついた。” (「沖縄一中鉄血勤皇隊の記録(上)」p.297)

証言(2) 大城勲さんの証言

“新垣十字路をへて真栄平をすぎると、前方に緑の丘があらわれた。目的地の摩文仁岳(標高 89 メートル)である。朝もやにつつまれた樹林が水墨画のようにかすんで見える丘には、ひさしぶりに陽がさしていた。隊列の兵隊たちはここに来ると、一様に「おお」と声をあげた。戦場にそぐわぬ穏やかな情景がひろがっていたからだ。「ここもやがて戦場になるのだ」と僕は摩文仁岳をつくづく眺めた。” ※5月27日 (「沖縄一中鉄血勤皇隊の記録(上)」p.344)

証言(3) 喜舎場朝介さんの証言

“摩文仁の朝の光景は、いまでも忘れられない。摩文仁岳は戦争の傷あともなく、野山は緑につつまれ、集落の家々から朝げの煙が立ちのぼっていた。荒涼たる廃墟ばかり見てきた僕らはおとぎの国に迷いこんだような気がした。こんなすばらしい所があったのかと思った。しかし、その美しい山野が首里のような荒廃した光景に変わるのに、一週間とかからなかった。” ※5月29日 (「沖縄一中鉄血勤皇隊の記録(上)」p.351)

証言(4) 伊波盛勇(仮名)さんの証言

“5月25日頃になると、石部隊の野戦病院がこの壕にも入ってくるし、周囲の民間壕にも入りはじめた。それまでは石部隊の病院壕は首里のナゲーラの川沿いにあり、首里高女生が従軍看護婦として配置されていたが、首里戦線が悪化したので保栄茂に移動してきたという。あたりは急にさわがしくなってきた。” (「沖縄一中鉄血勤皇隊の記録(上)」p.305)

では、なぜ日本軍はそのような作戦・行動を取るに及んだのだろうか？まずは日本軍がどのように沖縄の住民たち

に接していたか、いくつかの証言・資料を下に考えてみたい。

証言(5) 伊波盛徳さん(当時 39 歳)の証言

“労務は、飛行場へ何人、陣地構築へ何人という具合に配分するのですが、一方が終らないのに、他の方に同じ人が動員されることもあって困りました。その時、兵隊たちからよく聞かされたことは、君たちは君たち自分の郷土を防衛するのだからどんなことでもやるべきだ、ということでした。それは、絶えず兵隊たちに聞かされる言葉でした。そんなことで労務の時は、なかなか家には帰しませんでした。”（「中城村史 第4巻 戦争体験編」(1990)pp.96-97）

証言(6) マツさん(仮名)の証言

“友軍はね、あんまり精神よくなかったですよ。情けの薄い、わるい人が多かった。もともと、兵隊さんは沖縄を守ってくれるわけだったでしょうがね。それがあんな、けっきょくはうちら住民を虐待してよ。泣くからと言うて子供を殺したり、食糧盗んだり、住民の掘った壕を占領して女子どもを追い出したですからねえ。あれらはかならず言いおった。住民なんかどうなってもいっこうに差しつかえんが、日本の兵隊が一人でも死んだら戦争に勝てん、とね。”（真尾悦子「いくさ世を生きて 沖縄戦の女たち」p.137）

証言(7) 上間ヨシ子さんの証言

“そのようなとき(6 月末頃、米軍が投降勧告しているとき)、この周辺に生き残っていた日本兵が、ヨシ子さんたちの壕入口にも近づいてきた。「タバコをくれとか何か食べ物を出さなかったら手榴弾を投げつけるぞ、と壕入口で鉄かぶとをかぶった日本兵が声をかけるのです。母は、『うちもなんにもないですよ』とこたえるのです。私はひっぱり出されはせんかと心配で母の背でふるえていました。この日本兵が、付近の壕に手榴弾を投げ込むのを見ました。パーンと破裂していました。多分、そのとき同じ日本兵か民間人が殺されているはずです。そこで、母は、日本兵にここで殺されるよりは、万一父が満州から帰ってきたら私たちの遺骨が拾えるように、自分の屋敷で死のうということで、私は長男をおんぶしてこの壕を出ました(後略)」（「証言・沖縄戦」p.28）

資料(8) 「輜重兵第 24 連隊第 5 中隊 陣中日誌」(1944 年 12 月 31 日、主力 宇久田 一部 富盛)

所見

地方民力の強力なる戦力強化について

島嶼守備作戦は極度の広正面防禦戦斗にして之れが為地形の利用就中徹底せる築城の価値は頗る大にして之れと共に熾烈なる敵砲爆撃及び火力万能主義の敵を思ふとき凡ゆる地域に迅速にして徹底せる築城を実施することは極めて緊要時にして且軍需品其の他戦斗資材を独立的に配分掩護するの要切なるは現下に於ける対

米島嶼作戦の特性にして今更贅言を要せざる所なり 而して之が目的達成の為最大の難事は作業力の供給なり 防諜上許し得る範囲内に於て此地方民力を活用することに関しては上司に於ても夙に著目され既に実施中の所なるも一刻を争ふ現戦局化 皇民化意識の徹底せざる本島人を思ふとき更に其の民力の供給を強力に一元的ならしむると共にその指導に於ては軍隊的ならしめ 強力なる精神指導機関を特設し以て旺盛なる皇民意識の下積極潑刺たる御奉公を感激の中になす如く指導すると共に一部の者に対してはジャハ其の他南方所域に於て実施中なる兵補制度式に練成し以て 唯単に敵上陸前に於ける作業力を供給せしむることにとどまらず将来敵上陸時に於て準軍隊となり或は真の日本臣民としての聖戦直接参加まで推進されざるべからざるを痛感す

資料(9) 八原の手記

“やがて居室に帰られた参謀長に、会同の事情を報告し、「第 62 師団の意見もあるが、これは人情論である。彼我一般の状況に鑑み、首里城を中心とする複郭陣地に移るのは至難である。本土決戦を少しでも有利ならしめるためには、あくまで抗戦を続けるべきである。ひと思いは死んでしまうといった野蛮人的感情論で、軍今後の作戦方針を決めるのは極力避くべきである。この意味において、喜屋武半島後退案こそが最も現実的で、軍本来の作戦目的にも適うものだと思います」と今度は断固たる態度で意見を申し上げた。” (p.330)

“軍は天久台、那覇方面の激戦に予備兵力を使い果たして、この危急(引用者注・与那原方面右翼の崩壊)を救うための持ち駒が一見なくなったように感じた。ところが、よく考えて見ると、まだいくらでも兵員はある。歩兵的戦闘訓練はほとんど受けていないが、とにかく頭数は相当数あるのである。軍砲兵隊、高射砲部隊、通信部隊、築城部隊、兵器廠、貨物廠、防衛招集者等々兵器の大半を失い、あるいはその本来の任務が著しく軽減した部隊の兵員を、直接戦闘任務につかしむれば、よいのである。” (p.333)

→ 日本兵は沖縄の住民のことをどのような存在として扱っていたか？

→ 日本兵の沖縄住民の扱い方に対し、日本軍の作戦はどのような構造的影響を与えたか？

日本兵が沖縄の住民をいわば「人間の盾」として利用したことの背景にはどのような理由があったのだろうか？勿論、地上戦という緊急時に、個々の日本兵が生き残りたいが余り蛮行に及んだとの事情もあったかもしれない。しかし、それとは別に、沖縄の住民の搾取・犠牲を正当化した構造的要因はなかっただろうか？

証言(8) 伊芸徳一さんの証言

“(引用者注・交渉して陣地壕に身を寄せているとき)出入口で、衛兵が立ち、地方人は絶対には入れない、県庁の職員だから入れるのだと恩を着せた。だが、伊芸さんらは、壕内で非常に驚いた。「伝令兵が隊長に伝えている声が耳に入ってくるのです。『サイパンあたりの沖縄人捕虜が敵のスパイとなって、各部隊に地方人にまぎれて入り込んできている。この捕虜は、赤いハンカチと、飛行機と連絡を取るために反射鏡を持っている。だから地方人はよく調べなさい』というやりとりを聞きました。これを耳にして、われわれも危なくなったな

あと이었습니다。」ところが、約1時間も経ったと思ったら、その壕を追いたてられた。この壕を出て行くとき、背後から銃をつきつけられた。そのとき、ここで殺されるのではないかと内心恐怖におののいた。安全と思える海岸端を通って行こうとしたら、部落内を通って行けと命じられた。艦砲がしきりに炸裂している日中に、いくら頼んでも壕を追いつ出すと言うことは、「死ね」ということだと伊芸さんらは思った。”(証言・沖縄戦)p.196)

証言(9) 東野恒和さんの証言

“沖縄戦について、死以外に象徴的なのは「差別」だったという。「沖縄の女が日本人の子を産むのは名誉だ」と言っていた先輩兵二名がある日、重営倉に入れられた。地元の女性を強姦したという。事件直後に小泉准尉や野口曹長が「馬鹿なことをしやがって」と怒声を放っているのが聞こえた。古参兵であるほど、沖縄住民を差別する者が多かったという。壕の中でも、部隊幹部や古兵が安全な場所を陣取り、住民はよしんば壕に入れても、入り口付近に身を寄せ合うのが関の山だった。”(国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」pp.27-28)

証言(10) 渡辺憲央さんの証言

“沖縄住民への差別意識もあった。沖縄に渡った渡辺氏らは生活様式や言葉など文化の違いに戸惑う。便所の床下には豚がいた。その豚たちが自分らの糞尿を餌にしようと口を開けて待っているのを見て、飛び上がって驚いた。日本語とは異なる言語を話す人々が、米ではなく芋を主食にし、裸足で生活していた。我如古や金城、島袋という沖縄の兵隊たちは、本土の兵士に馬鹿にされ人一倍辛酸を嘗めた。食糧事情が逼迫してからは、「(食べ物を)出さねば殺す」と、住民を銃で脅して食べ物を奪う強奪兵もいた。捕虜収容所で出会った兵士は「壕から住民を追いつ出した」と渡辺氏に語った。その兵士は「俺たちはお国のために最後まで戦って沖縄を守るんやから」と、住民を壕から追いつ出す行為を当たり前のように話していたのが、印象に残っている。ただ、渡辺氏は「その兵士を単純に責めるわけにもいかない。みんなが生きたい。敵に包囲され、壕は沖縄の人で一杯で、自分も生きようと思ったら中の人を追いつ出すしかない。その極限状態を知る者にしか分らない」と声を落とす。渡辺氏自身は切羽詰まった住民にせがまれ、持っていた手榴弾二発を渡したこともある。「沖縄の人は日本人以上に日本人であろうとした」。”(国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」p.33)

証言(11)

遺品 手榴弾(あらゆる壕から出土することを強調)

“「集団自決」の現場には、死装束の、正月用の着物に着替えた女性や子どもがたくさんいた。その場所では防衛隊員が雑糞いっぱいに入れた手榴弾を住民に配っていた。「(数少ない)貴重な武器がこんなにたくさん出回ったのは軍の許可か命令があった証拠」と語る。”(国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」p.23)

→この部分で、

1限で引用した手榴弾に関する証言を再度使用しても良い

資料(10) 「石部隊 石兵団会報 第 49 号」(1944 年 9 月 7 日)

二、防犯関係

2. 姦奪は軍人の威信を失墜し民心離反若くは反軍思想誘発の有力なる素因となるは過去の苦き経験の示す所なり 殊に沖縄県人中には他府県人に比し思想的に忘恩功利傾向大なるもの多く其の具体的表現は中傷陳情投書等を以てせらるるが故に掠奪乃至強姦の域に達せずと雖も之に近似せる所為のみにて軍に対する反感を醸成するに至るべし 且一部地域には貞操観念弛緩しある所あり之が誘惑に乗ぜられ不知不識の間猥褻姦通略取誘拐住居進入等の犯罪を犯すことなからしむること

3. 管下は所謂「デマ」多き土地柄にして又管下全般に亘り軍機保護法に依る特殊地域と指定せられある等防諜上極めて警戒を要する地域なるに鑑み軍自体此の種違反者を出さざる如く万全の策を講ぜられ度

五、近く外出を許可せらるるも地方人家に立入るを禁ず 物品を購入する場合と雖も店先にて調弁し家中に立入るべからず 各部隊共一兵に至る迄教育を徹底せられ度

資料(11) 「石部隊 石兵団会報 第 88 号」(1944 年 11 月 30 日)

十五、軍会報中必要事項

3 法務部に於て取扱へる事件中沖縄県出身初年兵にして従軍免脱を図りて一名は小銃を以て股を貫通し一名は左手食指を銃剣にて切断せるものあり、原因は種々あるも他府県の兵と言語の相違と能力低きに原因するを以て初年兵教育には注意せられ度

→ 沖縄の人の犠牲・搾取を正当化し、時に彼らの組織的殺人まで誘発した構造的要因は何だったのだろうか？軍、または個人の兵士はどのような論理で沖縄住民を犠牲にしていたのだろうか？

証言・資料から浮かび上がるのは、沖縄の人に対する日本軍の蔑視・猜疑心が沖縄の住民を搾取し、犠牲にすることを前提とした作戦・行動に繋がったのではないかと、ということである。では、いつ、なぜ、どのようにしてこのような蔑視・猜疑心が生まれたのだろうか？資料・証言は、このような蔑視・猜疑心が始まったのは、沖縄戦以前であったことを示している。

証言(12) 近藤一さん・御簾納福三郎氏さんの証言

“石部隊独立歩兵第 13 大隊の近藤一氏らが証言するように、「沖縄の人は本土の人間と違う」という感情が多くの兵士たちの間で湧いた。その結果、「(たとえ、生死をともにする仲間である)同じ中隊の戦友であっても、沖縄出身の人は馬鹿にされていた」(独立高射砲第 27 大隊の渡辺憲央氏)という。近藤氏は、「むしろ、中国人に対する差別感と同じような見方をしていた」と話す。海上挺進第二戦隊の御簾納福三郎氏も、「対中国の優越感。それと似たような、見下す感情を沖縄住民にも抱く風潮はあった」と同調する。” (国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」pp.113-114)

証言(13) 高島大八さんの証言

“部隊の行軍中、通り過ぎたばかりの無人だったはずの集落から泣き声が聞こえる。振り返ると 200 メートルほど後方で 2 歳くらいの幼児がしゃくり上げている。「撃て」の号令に兵五、六人が小銃で狙った。そばにいた両親にはすぐに命中し、倒れた。しかし、幼児は泣き続ける。「打ち方やめ」の号令を聞き、「わざと当てなかったのか、的が小さいから当たらないのか。とにかくほっとした」と、高島大八氏(注記略)は当時の心境を振り返る。(中略)石部隊独立歩兵第 12 大隊所属の高島氏は、右記のような中国での体験から切り出した。「軍隊というところは真空地帯」と表現する。一般世間の常識は通らない。上官、先輩から殴られて半殺しの目に遭わないよう、理性や感情、判断力を働かさずに、言われたことを機械的に遂行する。「(日本軍部隊の)普通の中隊だと、生きた捕虜を連れてきて『度胸試し』と称して初年兵に突き殺させるんですわ」。さらには、「肝試し」のために、先刻殺した捕虜のポケットにあらかじめ何かを入れておいて、晩になってから新米兵一人ずつにそれを取りに行かせる。こんなことを繰り返すうちに「向こう(日本軍の上官)に言わせたら『一人前』の兵隊になる」と話、高島氏は遠くを見詰めた。中国から沖縄に転戦した兵士はかなりの数にのぼる(注記略)。その一人だった高島氏も当時は、沖縄の住民を戦闘に巻き込んだことについて、「なんとも思わなかった」。幼いころから「日本は桜咲く美しい国」「日本人は偉くてきれいな人間」と教育されてきた。日本が悪いなんて微塵も思わなかった”(国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」pp.36-38)

証言(14) 近藤一さんの証言

“(引用者注・刺突訓練を命じられるも)「中国人は同じ人間じゃない」と上官や先輩兵に叩き込まれてきた分、良心の呵責は少なかった。”(国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」pp.116)

“日本軍部隊はしばしば中国人の集落にも「討伐」に出かけた。日本軍が来るのを察知すると中国の住民は逃げ出して、集落はもぬけの殻になる。そこへやって来た日本兵が金目のものや食べ物を漁る。しかしながら、時折逃げ遅れた住民が兵士に捕まる。近藤氏らは、集落で捕まえた女性を輪姦した。放心状態で声も出せない女性を、兵隊仲間七、八人で入れ替わり弄んだ。憲兵らに見つかると罰せられるなどの理由で、「たいていの場合、女性は口封じに最後は殺された」(近藤氏)。”(国森康弘「証言・沖縄戦の日本兵」pp.117-119)

資料(12) 「沖縄県の歴史的関係及人情風俗」(沖縄連隊区司令部、1922 年 12 月)

第二章 人情風俗習慣及民度

第一節 一般の人情

本県の人情及個人の性格に関して上述の如く主権者の興廃及三百年來圧迫政策の關係と教育程度の低級と交通困難なる孤島の影響とを受け一種の特質を生ぜり然れども近年教育の普及と一般住民の自覺自奮に依り逐年改善修練せられつつあるも尚其趣を異にせる点多し

其一 短所

一、皇室国体に関する観念徹底しあらず

久しき間日支両国の間に介在し独立自覚力なく徒に数百年來島津氏の圧迫を受けし為義に感し恩を思ふの念なく唯自己の生命財産を保存せんことに勉め何人の統治を受るも敢て之を顧慮することなかりし結果第二の天性となり個人主義のみ発達して終に明治初年に及へり現今学校教育は精神教育に大に努力しつつあるも未だ理想の域に達せざること大なり

二、進取の氣象に乏しく優柔不斷意志甚だ薄弱なり

永年間に圧迫を受けるのみにして權利自由を掠奪せられ加ふるに外界の刺激少なく卑屈にして理性及人格觀念の欠乏進取の氣象時給制の欠乏等何れも意志薄弱なるに因る

三、遲鈍悠長にして敏捷ならず

生活程度低く氣候及び農産物の天恵は終に貯蓄心を薄からしめ活動力を消磨せしめたり

六、協同心公德心慈善的觀念乏し

是文化の程度と比例すと雖本県人は一般に冷淡なり畢竟利己的觀念のみに囚はるるを以てなり公共団体のために尽す社会奉仕の觀念及び社会生活に必要なる公德の薄きは通有性なり

其二 長所

長所として賞賛すべき点少きは遺憾なれども比較的県人の長所とするものを上ぐれば左の如し

一、服従心に富む

自ら進んで為さんとする勇氣は乏しきも指導其宜を得ば何事もなしえる美質を有す是一部の村に於ては着々成果を挙げつつある所以なり沖縄出身軍人に就て見るも歩哨斥候の如き独断を要することは不適當なれども指揮官に依り指揮せらるる間はよく困難に堪へ勇敢なり

結論

以上説述したる所は徒に沖縄県人の欠点のみを指摘し長所として見るべきもの極めて少しと雖素より先進他府県とを比較したるものにして全く文化程度の低きに因るものなり蓋沖縄県に自治制を施行せられたるは漸く昨大正十年のことにて今や県民は大に其欠点を自覚し孜々として努力向上しつつあり他府県と比肩し得るに至る遠き将来にはあらざるべし (後略)

→ 日本軍・日本兵はいつ、なぜ、どのように沖縄の住民に対する蔑視・猜疑心を持つようになったのだろうか？

→ そのような蔑視・猜疑心は、沖縄戦中の日本軍の作戦・行動をどのように規定したか？(強制的な徴発・壕追い出し・スパイ疑惑・自決の強要など、具体的な事例の背景にある歴史的・構造的要因を考える)

◇ 沖縄と日本

沖縄は元々日本の領土ではなく、「琉球王国」という独立した国家であった。1429 年に尚巴志が琉球を統一して以降、東・東南アジア貿易圏の中心として、東・中国・朝鮮・東南アジア諸国・日本などとの貿易で繁栄し、独自の文化を発達させた琉球であったが、1609 年に薩摩藩による侵攻を受けて以降、日本による圧力に曝されるようになった。薩摩の侵攻以降も、琉球は「日中両属」の外交方針を採り、交易国家としての位置を守ったが、琉球に対する主権を確立させることを企図した明治政府が 1879 年に、所謂「琉球処分」(琉球併合)を断行し、国家としての独立を失った。「沖縄県」として日本に併合されて以降、沖縄は日本による差別・蔑視に曝された。独自の文化・言語を持っていた琉球に対し、日本は同化・皇民化政策を断行した。「方言札」による、沖縄語の使用の禁止と標準語励行はその典型例である。一方、「本土」の日本人と同じ文化・歴史を共有しない沖縄県民のことを「皇室国体に関する観念が徹底していない」「進取の気性に欠け、協同心・公德心・慈善的観念が乏しい」「遅鈍悠長にして敏捷ならず」などと差別する傾向は継続した。このように、日本に無理矢理組み込まれた沖縄は、天皇を中心とする単一的な支配を目指すイデオロギーと、国内における異文化・異民族の存在との矛盾が集まる場所となり、激しい差別の対象になってしまったのである。



<遺品カタログ>

凡例

- (1) 遺品の名称
- (2) 出土場所
- (3) 遺品に関連する発問
- (4) その発問に対応し、遺品から推測できる事項
- (5) 授業でその遺品を使用する意義

(1)	タンスの飾り
(2)	糸満喜屋武陣地壕
(3)	● タンスの飾りが出土することから、その出土場所は元々どのような場所であったと想定されるか？ ● タンスの飾りが「遺品」として「陣地壕」から出土すると言うことは何を暗示するか？
(4)	● タンスのような民間人が使っていた品物が出土することから、その場所が元々は民間人が長期的に生活するために使用していた場所だったと推測される。 ● 民間人が生活していたと推測される場所が「陣地壕」になったことから、その場所に日本軍が入り込み、生活の場を軍事化したのではないかと推測される。 ● タンスの飾りが「遺品」となったことから、その持ち主が壕の中で犠牲になったか、もしくは壕の外に追い出されたのではないかと考えられる。 ● 持ち主の犠牲と、日本軍による民間人の生活の場の軍事化との間に関連性がある、つまりその持ち主は日本軍の行動によって犠牲にされたのではないかと推測される。
(5)	● タンスという、一時的な避難場所には持って行かないものが遺品として出土することは、「本土」における防空壕のイメージとは違い、沖縄のカマは民間人の長期的生活の場であったと言っていることを明示する。そのことに対する気づきから、沖縄戦は軍隊だけの戦闘ではなく、無辜の民間人の生活を巻き込むものであったということを実感して貰うことが出来る。 ● 証言と遺品とを見比べることなどを通し、民間人の生活の場の軍事化・壕追い出しなど、持ち主の犠牲の背景にある日本軍の加害責任の問題にまで思考を及ぼすことが出来るので、民間人を戦闘に巻き込んだ「加害者」としてのポジショナリティから沖縄戦の歴史を議論することが出来る。

(1)	ピンセットなどの医療器具・ワカモトや正露丸の薬瓶
(2)	白梅の塔の壕など
(3)	● 医療器具が出土することから、その出土場所は元々どのような場所であったと想定されるか？ ● その医療器具を用いていたのはどのような人であつただろうか？またどのような医療行為がなされていたのだろうか？(遺品のみでは考えにくいので、薬瓶など別の遺品と組み合わせたり、関連する証言と対照したりして考える) ● 医療器具が「遺品」として出土することから、その出土場所にはどのようなことが起こったと推測されるか？(例えば白梅の塔の壕など)

証言(1) 大村光憲さんの証言

“(注・砲撃を受けて野戦病院に寝かされているとき南部撤退の命令が下る)動けない連中は、みんな青酸カリで殺したり、あるいは僕は見なかったんだけど、タオルで絞殺したのもおると。そこにそのまま寝かして、壕にですよ、撤退ですから。衛生兵が来て、どんどん(注射を)打っていく。もう皆動けなくなってる連中だから……。僕も打たれていますよ。打たれたけども、ちょうど砲弾が来てその場で爆発したものだから、衛生兵がびっくりして逃げたんですよ。だから静脈には打たれてなかった。あれが(静脈に)打たれとれば、私もう、そのまま消えちゃったわけですよ。打たれかけたんでなくて、打たれてます。でも、静脈を外れてる。黒くなってましたよね。” (NHK「証言記録 兵士たちの戦争⑥」p.157)

証言(2) 又吉ヒデさんの証言

“その後、ヒデさんは、与座岳のほうで負傷兵が目の前で毒殺されるのを見た。「戦争が島尻でも激しくなっからは、負傷兵も手当を受けていません。私たちが与座岳にいるとき、隣の日本軍の大きな壕入口付近で、若い兵隊が手をやられて、大きな声で『痛いよー、痛いよー』ところげまわっていました。すると『いま、なおしてやる』といって、手をつかまえて注射したら、すぐ動かなくなったのを見て、私は、『あら、注射して死なせているさ』とつぶやきました。そのとき、私も子どもが泣いたら、『子どもを捨ててきなさい』とか、『子どもを殺すよ』と日本兵にいわれました。】”(「証言・沖縄戦」p.160)

資料(1) 「沖縄県史 各論編 6 沖縄戦」

“女子学徒たちの任務はほぼ共通しており、負傷兵の食事や飲み水の世話、尿や便などの下の世話、汚物の廃棄、治療の手伝いなどであった。手術室に配置された生徒は、照明用のローソク持ちや切断する手足を押さえ捨てに行く仕事、手術用具の準備などをさせられた。そのほか、飯上げ(食事の受け取り)や水汲み、死体埋葬、伝令などの仕事もあり、それらは砲弾の飛び交う壕の外での命がけの仕事だった。戦闘が日増しに激しくなり負傷兵が増加すると、各病院では分室を設置し対応することになった。病院壕の中は血と膿と排泄物の悪臭が充満し、負傷兵のうめき声と「尿器下さい」「水をくれー」と哀願する声が絶えなかった。治療が行き届かず負傷兵の傷口には蛆が湧き、それを取り除くのも学徒たちの仕事になった。場所によって多少の違いはあるが、患者の食事は一日におにぎりが一個か二個しかなかった。学徒の食事と同じような状況だった。学徒たちの勤務は激務で、ろくに寝ることもできず、医療品箱等に座ったまま休養をとらなければならない所もあった。目玉が飛び出し、顎がなくなり、腸が飛び出すなど見るに堪えない傷を負っている負傷兵、手術で腕や足を切断された負傷兵、

	脳症で頭がおかしくなった負傷兵、病院壕内は様々な負傷兵で溢れかえっていた。その多くは治ることもなく死んでいった。” (p.349)
(4)	● 医療器具が出土することから、その出土場所が「鉄の暴風」を避けて壕・ガマ内に作られた野戦病院であったと想定される。 ● 軍医だけでなく、民間から動員された看護要員、特に従軍学徒隊のように学習者と年齢の近い女性も医療行為に携わった。ただ実際は、ワカモトや正露丸を医薬品のように用いていたことから判るとおり、日本軍は資材不足のため満足な医療行為を行うことが出来ず、麻酔なしの切断手術を行ったり、最悪の場合は独歩不可能な重症患者を「処置」したりすることもあった。 ● 医療器具が「遺品」として、火炎放射の痕跡を残す遺品などと一緒に出土することは、野戦病院であっても火炎放射など、米軍の無差別攻撃の対象となったことを示している。
(5)	● 医療器具は学習者に近い年齢層の女性が、どのような形で戦争への協力を強いられたか明示するので、沖縄戦がいかに民間人を巻き込むものであったか判りやすく伝えることが出来る。 ● 医療品・医療行為に関する遺品・証言からは日本軍の物資不足の実態がはっきりと読み取られ、日本軍がいかに無謀な戦争をしていたのか、またなぜそれほど無謀な戦争を選んだのか、考えるきっかけになる。 ● 無謀な戦争な実態を考えると、沖縄戦中の日本軍は沖縄の住民や個々の兵員の人命が犠牲になることを厭うことなく、「皇土防衛」「国体護持」だけに拘泥していたことを実感することが出来る。 ● 野戦病院までが無差別攻撃の対象となったという事実から、米軍の攻撃の非人道性についても言及することが出来る。

(1)	火炎放射の影響を受けた遺品
(2)	白梅の塔の壕など
(3)	● これらの遺品が出土した壕はどのような攻撃を受けたのだろうか？その壕にいた人はどのような経験をしたのだろうか？ ● これらの遺品が壕の内側(入口付近ではなく、より内部に入った部分)で出土したことから、米軍の攻撃はどれくらいの威力だったと考えられるか？(※白梅など、内側が黒くなった壕の写真を使うのも良い) ● なぜ米軍はこのような苛烈な攻撃を加えたのだろうか？
(4)	● 米などが炭化し、ガラスが融けていることから、火炎放射による攻撃を受けたものと思われる。 ● 壕の奥まで熱が到達し、焼死する人もいた。 ● 米軍は日本軍の陣地壕の他、住民がいるかもしれないガマや野戦病院にまで攻撃を加えた。住民がいるかもしれない壕にまで攻撃対象を広げたのには、日本軍は住民のいる壕まで陣地とし、侵入した結果、壕内で軍民が混在する状態になったことが一要因である。
(5)	● 火炎放射による攻撃の生々しい痕跡が残る遺品を見ることで、米軍の攻撃の苛烈さ、また住民の生活の場まで戦場となることの深刻性を実感することが出来る。 ● なぜ壕が戦場にされてしまったのか考えることにより、日本軍の持久作戦の問題点や沖縄戦で犠牲

	者が拡大してしまったことの理由などを考察することが出来る。
--	-------------------------------

(1)	手榴弾
(2)	様々な場所
(3)	● 国吉氏によれば、手榴弾はあらゆる壕から出土している。何故それほど手榴弾は広く行き渡ったのだろうか？ ● 日本軍が手榴弾を広く行き渡らせた理由は何だったのだろうか？ ● 〔陶器製手榴弾を引き合いに出して〕陶器製手榴弾が使われたことは何を暗示するだろうか？なぜ日本軍は陶器製手榴弾を使ってまで戦闘を継続しようとしたのだろうか？
(4)	● 攻撃用のみならず、自決用として日本兵が住民にまで手榴弾を配布したことが、手榴弾の浸透の一要因となった。 ● 沖縄の住民が捕虜になり米軍に軍事機密を伝えることを怖れた日本軍は、手榴弾を配布し、また米軍に関するデマを流すことで、米軍に追い詰められた住民の自決を誘発しようとした。その背景には、沖縄の人々を利用しておいて使い捨てにする日本軍の沖縄蔑視と、「本土」とは異なる文化・歴史・言語を持つ沖縄の人々に対する日本軍の猜疑心とがあった。 ● 陶器製手榴弾の使用は日本軍の物資不足の証左である。陶器製手榴弾を使ってまで戦闘を継続しようとするほど、当時の日本軍は無謀な持久戦を戦っていたのである。 ● 沖縄戦は本土決戦までの時間稼ぎと、相手の消耗を図る持久戦であった。そのため、沖縄住民や個々の日本兵の犠牲が拡大してもなお、戦闘を続けることが優先された。
(5)	● 手榴弾が住民に浸透した背景を考えると、沖縄の人々に対し蔑視・猜疑心を持ち、彼らを使い捨てにして自決を強いようとする日本軍の問題点について考えることが出来る。 ● 陶器製手榴弾を用いることで、日本軍の持久作戦の無謀さ、そして軍がいかに沖縄住民や個々の日本軍の人命を軽視した作戦を採っていたか実感することが出来る。